

奥津温泉の大火

江戸時代には、津山城下町と伯耆倉吉を結ぶ倉吉往來の宿場町として整備されてきた奥津温泉は、従来は山間部の小さな宿場町でしたが、明治時代以降に交通網の発達等で移動が容易になると、往來途上の宿泊や近辺の人々の湯治場としてのみではなく、多くの客をよぶための観光開発が図られます。

大正三年（一九一四）、奥津の牧野又一郎が、現在の奥津荘の場所に二階建ての温泉旅館を建設し、「錦泉楼」と名付けて営業を始めました。



写真1 錦泉楼

この錦泉楼は一四〇〜一五〇人の収容能力と芸妓十数人を置いて、奥津温泉を見下ろす山城跡（城尾山・法師ヶ山城）にもビアガーデンを開き、併せて定期自動車も経営して客の誘致に努めたことにより錦泉楼は繁盛し、奥津温泉の名前も広く知られることになりました。

しかし、その経営も長続きせず後に羽出の伊丹慎孝の手を経て、大正十五年（一九二六）、津山町の鉄本清逸が経営を受け継ぎ、娯楽設備や音楽堂を設け、前年に放送が始まったばかりで当時は希少だったラジオを購入するなど、経営再建に向けて整備された矢先の大正十五年五月九日午後四時四〇分頃、夕食準備中の錦泉楼の炊事場の煙突から舞い上がった粉火が強風にあおられ大火となり、温泉街一帯に燃え広がりました。

火災は午後八時頃に鎮火しましたが、当時の新聞「山陽新報」によれば、「其時は既に川東部落（現在の吉井川左岸の奥津温泉街一帯）は全滅していた」という状況で、罹災世帯数四五、消失した建物は五二棟に及びました。損害見込額三〇万円といいますが、現在の価値に直せば一億五千万円以上という、奥津温泉史上最大の火災となりましたが、幸いなことに死者はありませんでした。



写真2 火災直後の様子

奥津村では、緊急村会を開いて一週間以内にバラック（仮設建物）を建てることを議決し、村民が炊き出しを行いました。また、郡役所と警察署はただちに職員を派遣し見舞いと共に被害調査を実施し、その惨状が見るに忍びないものであったことから、苦田郡町村会長と苦田郡長は義捐金募集の計画を立て、中国民報津山支局と山陽新報津山支局の後援を得て、町村会長田口梁兵・郡長小沼敬三郎の連名で五月十二日付けで、各地へ要請しました。その結果、同年一〇月には義捐金七四七九円二二

銭と、救援物資として衣類雑貨が車八台分、醬油・漬物・野菜類が車二台分集まったと記録されています。奥津温泉では、この火災以外でも明治十八年（一八八五）、昭和十三年（一九三八）に大火が発生しています。

大正十五年の火災時の写真は、絵葉書にもなっていますので、当時の火災としてもいかに大規模かつ希少な出来事であったのかが想像できます。



写真3 火災後建てられたバラック

参考資料：『奥津町史』『苦田郡誌』

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733